

高津区おはなしアーカイブ

●森 武男（もり たけお）さん
昭和9年12月生まれ 81歳
川崎市高津区久末在住



◆ご家族のお話を

家族は、祖母、両親と4人兄弟の7人暮らしでした。私の上に兄が1人、姉が2人で一番下が私です。実は私は四男坊で、亡くなった兄たちがまだ2人いました。長男が水子で亡くなり、三男は7歳のときに肺炎で亡くなりました。母も畑仕事が重労働で母乳もよく出ませんでしたしね。ずっと生活を共にしていた次男の兄も結局シベリアで戦死しました。

父は、自分の厄年の42歳の時に生まれた子どもを、死なれては困ると、厄払いを考えたようです。生まれたばかりの赤ちゃんを一旦家の外の路地に置いて、それを近所の人に頼んで、抱っこして家まで連れ帰ってもらったそうです。いったん「子捨て」をして厄を

落としたようです。それが、1歳違いの姉の雪子です。

15歳の秋に、母が49歳で亡くなり、上の姉が母親代わりになりました。多感な時期だったので、父が焚いてくれる芯のあるご飯に切なさを感じたのを覚えています。



（祖母、両親と姉2人と一緒に）

◆小学校時代は

昭和16年に橘小学校に入学しました。国民学校の第1期生です。1歳上の姉は同じ学校に通っていましたが、尋常小学校でした。

昭和19年の4年生から卒業までは、川崎市立野川小学校に通いました。その理由は、久末にいた偉い人が、分校だった野川小学校を本校にすべくいろいろと手を打ったようで、久末の西側の妙法寺方面の子たちや私たち表久末の子ども、そして梶ヶ谷の一部の子どもたちを集めて、本校となった野川小学校に皆が登校することになりました。

橘小学校は歩くと50分、野川小学校も歩いて40分くらいかかったでしょうか。子どもだから、道草して帰ってくると1時間半は

かかり、夕方になってしまうとあたりは、もう真っ暗で、よく叱られたものです。

野川小学校では、元々いた連中が強くてよく苛められましたよ。あっちは縄張りを持つてるし、こっちは居候のような感じでね・・・。

何が違うってまず、言葉が違いますよ。こっちは「べーべー言葉」なんです。それに小学校の先生たちの教育方針も違いましたね。これだけいろいろなことが違うというのは、やはりそれだけ、お互いの交流が昔はほとんどなかったということですね。

でも、小学校を卒業する頃になると、だいぶ環境に慣れましたよ。子どもどものときのこの慣れるまでの苦労は、大人になってだいぶ役立ったと思います。野川だの橘だの、いろいろな地域に友だちが増えましたもの。今も各地域に、顔見知りがありますよ。

◆その頃の遊びは

当時の子どもには2通りあってね、真面目な大人しい子は家の中で遊んで、本を読んだりして勉強もよくできるの。あとは私みたいな、本なんか読まずに外で遊んでばかりの子ですよ(笑)。

夏は、矢上川で泳いだり釣りをしました。お盆に貰ったお小遣いから針とテングスを買ってね、フナやタナゴを釣りました。タナゴはヒレが綺麗でね。でも弱くて、釣れてもすぐに死んでしまうの。今や天然記念物のタナゴですが、釣れて嬉しかったのはフナのほうだったねえ。

冬は魚獲りの網を解体してスズメを捕まえました。藁で土台を作り、稲穂をつけてバネ仕掛けで罟をしかけるのです。テグスに針を付けて別の鳥も捕まえましたねえ。鳥の力は強くてテグスが切れることもありました。鳥を捕まえるのは、もちろん食用にするためですよ。

その他には、独楽回しや凧揚げやメンコで遊びました。メンコに似た遊びでは釘を使った「ぶっ通し」という遊びもありました。

外遊びでは「蹴飛ばし野球」もしました。都会から来た子が、ボールを持っていてね、それを使って、ルールは野球と一諸です。

ベーゴマもやったなあ。鉛を拾ってきて空の缶詰の中で溶かしてあとでヤスリで磨くのですよ。昔は買うおもちゃなどなくて、すべて手作りでした。でも、都会から来た子が成長して、いらなくなって貰ったおもちゃはハイカラでしたねえ。

◆当時の衣食は

子どものおやつは、夏はとうもろこしやジャガイモ、カボチャで、冬はサツマイモや柿でしたね。正月についたお餅を水餅などにして、4月くらいまで食べましたが、最後のほうは不味かったねえ(笑)。

大人も稲刈りのときのおやつは、土手の日なたで、サツマイモや柿を食べながらお茶を飲んでひと休みしました。

当時の小学生は着物と洋服が半々でした。貧乏人の次男は着物で、裕福な家の長男は洋

服でした。普通は長男の洋服をお下がりとして弟が着てました。私は小学校2年くらいまで着物だったかなあ。正月だけは普段は着せてもらえない、よそ行きの着物を母が着せてくれましたっけ。そのうち、新しい着物を仕立てるといふようなこともなくなり、7歳のお祝いも洋服でしました。

履物は夏は草履で冬は駒下駄でした。靴も買ってもらいましたが、なんだか恥ずかしくて駒下駄を履いてたなあ。

中学になったら高下駄になりました。

◆戦中戦後の様子は

こんな田舎でも、けっこう爆撃はあったのですよ。蟹ヶ谷には海軍の通信隊があつて機関砲を3本持ってました。今の久末団地の所には高射砲部隊もありました。あそこは、富士山、丹沢、東京湾が一望に眺めることができました。敵もそういう部隊の場所を知っていて、焼夷(しょうい)爆弾を落とすのです。

山の下には石油関係の倉庫もあり、そこには火災を引き起こす六角焼夷弾を落とし、溝口の工業地帯には爆弾を落としていきました。

忘れもしないのは昭和20年4月24日です。このあたりにB29が爆弾を落としていきましたし、その前の15日にはすでに小貝谷(こがいや)の4軒も焼失していました。

防空壕も、地主からどこの山でも掘ってよいと言われていて、自分たちで一生懸命に掘っていました。防空壕に入っている、高射砲の破片の「ウーン」と唸る音は本当に恐か

ったです。爆弾の音とも違うのです、その破片は記念に取ってましたが、すっかり錆びてしまいましたね。

寝てるときに、「危ないから壕に逃げろー！」と言われても、子どもながらに夏など疲れて熟睡していると、なかなか起きられないのです。終戦間際の爆撃のひどいときは祖母に「もう、危険だからずっと壕で寝てたほうがよい」と言われ、藁を敷いて芋の横で姉とともに寝てました。いまだに、その壕がありますが、よくぞこんなところで寝られたなあとしみじみ思いますよ……。

5年生のときに終戦になりました。その年の1学期は空襲が恐いので蓮華寺での寺子屋生活ですよ。近所の子も疎開してた子も1年生から6年生まで20人くらいが皆、一緒に勉強しました。勉強と言っても、結局は皆でござ本尊様の前の板の間でムシロ織りに似たコモ編みですよ。それを一括りにして高津小学校に持っていきました。それでも、もっと空襲がひどくなると自宅に帰されましたねえ。

小学校の6年間の担任はずっと同じ女性の先生だったけど、別の子は先生が一回、代わってなんだか羨ましかったなあ。

終戦後、6年生のときに給食が始まりました。といっても脱脂粉乳が2回と缶詰のサバの水煮が1回出ただけですが。どれもアメリカの救援物資ですよ。脱脂粉乳が大きなドラム缶に入ってたのを覚えてます。サバの水煮缶は美味かったけど、アルマイトの器の脱脂粉乳はあまり美味しいとは言えなかったなあ。

給食と同時に、よく身体検査で身長体重を測られました。戦後復興の一環として文部省の指令なんでしょうね。

給食といっても、日の丸弁当は毎日学校に持っていきました。弁当箱には梅干の酸で穴が開きましたね。中原の子たちは、戦後にあの辺に闇市があったから、贅沢に佃煮が弁当に入っていましたよ。でも、逆にそういう子たちから梅干は羨ましがられましたよ。当時は梅干なんてどこにも売ってないし、すべて自家製ですからね。戦後は食糧難で日の丸弁当でも良い方でした。

◆中学時代は

大戸中学校に入学しましたが、3年目に西中原中学校に移りました。西中原中学校の第1期生になります。

大戸中学校は、元は大戸小学校の旧校舎です。中原の人口が増えて新しく大戸小学校ができたので、隣りにあったこの旧校舎が使われることになりました。

西中原中学校には自転車に通いました。

当時、肩掛けカバンをカッコ良く見せるために、焼け跡からミシンを拾ってきて肩掛けヒモを、帯を使って長くし、お尻のところまで伸ばして使っていました。カッコつけた「やんばら学生」というのでしょうかね。

戦争中の教育も、当時は軍国主義一色でしたよ。今で言えば道徳の時間と言うのか、修身という授業では、イザナギノミコト伝説を信じ、教科書では日本の国土は8州からでき

ているとって、樺太、北海道、本州、四国、九州、台湾、満州、朝鮮がすべて赤で塗ってあるんだから。そういうことを叩き込まれたのに、終戦でそれが全部、ウソだと言われてびっくりですよ。教科書の再版が間に合わないからと言って、黒く塗り潰されてたり、糊で紙を貼って隠したりしてるんだからねえ。

中学の新設校も過渡期で大変な時期でしたよ。戦争中は国定教科書でだいたいどの小学校でも同じ勉強内容だったのですが、英語だけは自由科目ということで、学校によって違うんだよね。

大戸中学校では、私らの寄せ集めみたいな生徒と中原の生徒と一緒に英語を勉強したんだけど、中原の子は英語がペラペラでびっくりしたね。こっちは、アルファベットもわからないのに、あっちは簡単に読んでるんですよ。教育の格差を感じたね。もう英語がまったく分からなかったから、大嫌いになったよ。だから英語の授業になると、サボってましたよ(笑)。

中学卒業後は、家業につきました。中学3年のときに母が亡くなり、家の手伝いが大変で学校どころではなくなりました。実は、卒業前に長期欠席が続いていて、出席日数が足りずに、欠席届けを出せと担任から言われたほどでした。そのときに欠席届けを書いてくれたのが、当時すでに結婚していた姉の夫です。書道の先生をしていたので、あまりに達筆の欠席届けに担任が「これは、どうしたんだ！」とびっくりしていましたね(笑)。

◆戦後、大きく代わった久末

戦後に村の様子が大きく変わったのは鮮明に覚えています。やはり旧道から新道になったことが大きいですね。蟹ヶ谷の鷹巣橋(たかのすばし)から五反田橋に新道ができました。昭和18年の耕地整理の影響もあると思います。三角や丸だった耕地が段差がなく分けられました。この耕地整理は、食糧増産のために国が助成金を出して農家の工事費の負担を軽くしました。また、専門の工事人もいないので排水工事を自ら地元の人々で行いました。すでに4年生のときに兄と一緒に暗渠を作っていました。それからですよ、二毛作ができたのは。暗渠排水工事は、小学生の子どもぐるみでやりましたねえ。細い道を子どもの足でペタペタならしていくには丁度良いのです。子どもたちも喜んでやりました。久末から千年にも暗渠作りで皆で行きましたよ。

久末は疎開の人が増えると子どもが増えて橘小学校も野川小学校も人数が増えました。でも戦後はまた、皆自分の地元に戻っていたので、久末に留まった人はせいぜい3人くらいですね。

野菜と田んぼが半々だった久末が、二毛作により麦などが作れるようになったのは大きい発展ですね。

◆今、振り返って思うことは

本当に戦争は嫌ですね。いまだに忘れられないのは防空壕の中の恐怖です。人間て、本当に恐くて興奮すると無性に喉が渇くのです

よ。洗面器に水を汲んでおいて、皆でガブガブ回し飲みをしました。危険なときに父の「出る！」の声にいつも壕を出る準備をしていましたっけ。

また、終戦の年の8月23日のことも忘れられません。蓮華寺の寺子屋からアメリカの艦載機が空から何機も見えて女の子たちが恐くてワアーと本堂に駆け込んできたのです。それが、マッカーサー来日とあとで知りました。

戦後、地元でアメリカ人に銃を向けられて脅かされたこともありました。神経質な外人は私らを見て嫌なガキだなあとでも思ったのでしょうか。口にパイプを銜えて煙を出している強そうな彼らを見て、こりゃあ、戦争に勝つわけないやと子ども心に思いましたよ。

終戦といっても5年くらいしないと落ち着かなかったですね。飲み屋で、酒の飲み方の習慣の違いから、米兵に店主が誤解され、撃ち殺されてしまったという悲しい事件もありました。

現在は、女の子と男の子2人ずつの4人の孫に囲まれて、息子夫婦と妻の8人で暮らしています。小さい頃は寂しい思いをしたけれど、今はにぎやかになりました。

(平成28年10月17日取材)